

聖書：エペソ 1：20～23

説教題：教会の公同性

日時：2016年2月7日（朝拝）

2年前から教会の4つの特性（唯一の、聖なる、公同の、使徒的教会）について順番に学んでいます。今年は3つ目の「教会の公同性」について見て行きます。この言葉はあまり馴染みがないかもしれませんが。その一つの理由として考えられることに、聖書にこの言葉が出て来ないということがあります。一方、聞いたことがある人にとってそれはどこでか考えると、「使徒信条」においてではないかと思えます。「我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、云々。」この「公同の」とはどういう意味でしょうか。ギリシャ語でこれはカソリコスという言葉です。すなわちカトリックということです。ということは、私たちは使徒信条でカトリック教会を信じているのでしょうか。カトリックと言うと、私たちはローマカトリック教会のことをまず考えるでしょう。私たちはそのローマカトリック教会を信じているわけではありません。この「カトリック」という言葉、ギリシャ語のカソリコスという言葉は、「普遍的」という意味の言葉です。あるいは「全体的」という意味の言葉です。ですから私たちは普遍的・全体的な教会があることを信じて告白しているわけです。私たちが見ている一つ一つの教会が、それぞれで完結しているのではないのです。私たちはより大きな「公同の教会」というリアリティーに生かされているのです。1章23節に「教会はキリストのからだ」とあります。体はいくつもあるわけではありません。一つのかしらキリストに対して一つのからだがあるだけです。ですからその方のからだである教会は全体として一つなのです。私たちの目に見えるところを超えて全体で一つの教会があるのです。

歴史的に「公同の教会」という言葉が最初に現れたのは、110年のアンティオキアのイグナティオスの著作においてと言われます。彼がスミルナの教会に宛てた手紙の中に「イエス・キリストのいるところに公同の教会がある」とあります。その後、正統的な教会と異端とを区別するために、この言葉は用いられたようです。グノーシス主義、モンタノス派、アリウス派などと区別するために、全体的な教会とつながりのない教会は正統的ではないと。そして4世紀の終わり頃までには、キリスト教が国教化される中で、公同の教会＝帝国教会を意味するようになりました。

ローマ帝国内における唯一の合法的宗教という意味です。

その後、16世紀の宗教改革の時代に、この言葉の意味が改めて問われました。当時はローマカトリック教会が世界に広がっていました。その中でルターやカルヴァンの宗教改革が起こり、結果的にプロテスタントの教会が抜け出ます。その際、それらの教会は公同性を持つと言えるかが問われたわけです。全体教会から彼らは自分たちを切り離した。それは単なる分派ではないのか。教会の大事な特性である公同性をもはや持ち得ないのではないか。従ってそれはもう教会ではないのではないか。しかしそこでの再吟味を経て、その後のプロテスタントの教会でも公同性が告白されて行きます。日本長老教会の信仰基準であるウェストミンスター信仰告白でも第25章の「教会について」において、「共同または普遍的教会は」と語り出されて、このことが告白されています。また日本長老教会の憲法総則にも第2章に「共同教会」とあり、第7条で「公同性」について述べられています。

この教会の公同性の基礎は何でしょうか。根本的にそれは神は全世界の神であるというところにあります。神はこの世界を造られたお方。そして天地創造をなし終えて、それらのものをご覧になり、「見よ、それは非常に良かった」と言われています。しかしこの素晴らしい世界で人間が罪を犯したために、あらゆる呪いと災いが入って来ました。この世界は著しくその輝きを失いました。しかし聖書に示されていることは、神はこの世界を捨てられなかったということです。やがて救い主を遣わして、この世界を本来の状態へ取り戻すとされた。確かに旧約時代はイスラエルの話が中心です。しかし聖書から分かることは、イスラエルの選びもやがての全世界の祝福のためであったということ。創世記12章1～3節にアブラハムの召命の御言葉がありますが、3節最後に「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」とあります。すなわち神がイスラエルの国を起こされたのは、やがて全世界のあらゆる国々を祝福するためであった。そして旧約聖書には至るところに、来たるべき普遍性・万国性についての様々な預言や約束、予表などが見られます。

そして時満ちて約束の救い主キリストが遣わされました。この方において神は全世界を取り戻そうとされます。招詞で読んでいただいたエペソ書1章10節：「時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにおいて、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。」 神はキリストの十字

架を通して、この世界の罪の問題を解決し、キリストを信じる者たちと世界との間に、失われていた調和ある世界を取り戻してくださる。本来の美しい秩序と輝きを持った世界を回復させてくださる。そのキリストが復活して天に上り、父なる神の右の座に上げられ、21 節にあるように「すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」 今やキリストはいっさいのものを足の下に従わせ、一切のものの上に立つかしらとなり、そこから救い主としての働きをしておられます。このキリストの主権の普遍性、全世界性こそ、教会の公同性の基礎です。教会の特性は何と言っても、そのかしらなるお方の性質に基づくものです。そのかしらなるお方があらゆるものの上に主権を持っておられるので、その方に結ばれている教会も普遍性を持つのです。また公同的でなくてはならないのです。

23 節は教会についての素晴らしい御言葉です。教会はキリストのからだであり、キリストが満ちておられるところです。そのキリストについて「いっさいのものをいっさいのものによって満たす方」と言われています。少し分かりにくい表現ですが、「いっさいのものを満たす」という方は分かります。これはキリストは今やすべての上に主権を持っているということの言い換えです。分かりにくいのは「いっさいのものによって」という方ではないかと思えます。新共同訳はここを「すべてにおいてすべてを満たしている方」と訳しています。本来、キリストはすべてを満たしていると語るだけで十分と思われるのですが、その「すべて」を「すべてにおいて満たす」と表現することによって、その細部に至るまで、隅々に至るまでというニュアンスが強調されます。つまりキリストはあらゆることの上に、その隅々に至るまで主権を満ちたもうお方なのです。ですからこの方に結ばれている教会も、この方を映し出す特性を發揮しなければならないのです。教会の公同性とは、このような普遍的で広い主権を持つ方をかしらとして持つがゆえに、教会が持っている輝かしい栄光に満ちた特性なのです。

さて、この真理から導かれる適用についていくつかのことを述べたいと思います。まず一つ目は教会の公同性を信じる私たちは独善的であってはならないということです。私たちが絶えず覚えるべきは、私たちの教会だけが本当の教会なのではないということです。杉並教会も、日本長老教会も、より大きな公同の教会の中の一部分です。そのことを覚える時、たとえ群れの規模が小さくても卑下する必要はありません。

せん。その教会に属している人は、確かにその地域教会に属していますが、同時により根本的には目で見えてはいない大きな公同の教会、全体教会の一員なのです。また私たちは公同の教会を信じるがゆえに、他の地域教会も主にある一つの教会として認め、尊敬し、その交わりから豊かな祝福を受けるべきなのです。

しかしこのことは、数多く存在する教会をみな認めて、その全体からはみ出ないようにするとか、長いものにまかれるということではありません。教会の公同性は「量」的な観点からばかりでなく、「質」的な観点からも考えられなければなりません。すなわち多数の教会と同調するという形式的なつながり、外面的なつながりばかりを考えるのではなく、そのつながりの中身が問われなければならない。教会にとって大事なのは神の真理であり、教会のかしらなるイエス・キリストの御言葉です。これを抜きにしての、正統な福音をそちのけにしての、単なる外面的・組織的な一致には意味がありません。宗教改革者たちはこのことを強調しました。当時、ローマ・カトリック教会は全世界に広がっていて、そこから自分を切り離れたら、その教会は公同性を持たないと批判されました。しかし彼らは真理を抜きにしての公同性には意味がないとしました。

しかしそうは言っても、明らかに少数者であった宗教改革者たちは、どのような意味で自分たちの教会は公同性を持つと言えたのでしょうか。二つ目に触れたいことは公同性の歴史的側面です。すなわち彼らは使徒時代の教会とのつながりに訴えた。教会の公同性は、今存在している諸教会との間に平面的に求められるばかりのものではなく、時間的なつながり、歴史的な広がりもあるものです。そこにおいて改革者たちは公同性を主張できた。時には細々と、「残りの者」の状態であったかもしれないが、公同の教会は存続してきた。このように教会の公同性は時代を超えた教会との間にも求められるものです。この基礎にある真理は、昔あった教会も、今ある教会も、将来の教会も、本質的に一つであるということです。もちろん宗教改革者たちが、「改革された教会は常に改革され続けなければならない、みことばによって」をスローガンにしたように、教会は御言葉の光の下で改革され続けるべきですが、教会は時代時代によって変質はしない。以前の教会と今の教会は別物ではないのです。アダムとエバの時代から終末の時まで教会は一つなのです。従って私たちは過去の教会から多くを学ぶことができます。公同の教会には多くの霊的遺産があります。中でもウェストミンスター信仰基準は特にすぐれたものです。私た

ちはこれに積極的に学ぶことを通して、公同の教会の祝福に豊かにあずかることができるのです。

最後3つ目に公同の教会の理念は、さらなる全世界への福音宣教の使命と関わります。神はキリストにあつて全世界を求めています。そしてキリストは今やすべての上に普遍的な主権を持ち、すべての人を求めています。マタイの福音書28章18～20節：「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」使徒の働き1章8節：「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

従って私たちの教会の交わりと宣教は、人間社会を分断するあらゆる障壁を乗り越えて行くものでなくてはなりません。私たちは自分たちの好みで、その社会的立場や職業、性別や民族性などによって、誰かを教会からはじき出すことがあってはならないのです。教会は好きな者同士が集まる同好会、サークルのような所ではなく、公同の教会です。ですからあらゆる種類の人々に福音を語るべきですし、喜んで様々な人々を受け入れるべきです。もちろん個別の教会のそれぞれの特性や賜物に違いはあるでしょうけれども、私たちの側で勝手に対象を限定してはならない。一つの教会で全部はできなくても、他の地域教会との協力の中で、より世界を求めて行くこと、そして普遍的な教会が完成するための歩みをささげることへ向かわなければならないのです。

最後にヨハネの黙示録から公同の教会が最後に現れる時の姿を2か所見て終わりたいと思います。黙示録5章9～10節：「彼らは、新しい歌を歌って言った。『あなたは、巻物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。』」7章9節：「その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、

部族、民族、国語のうちから、だれにも数え切れぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。」　このような日がやがて来るのです！私たちは公同の教会の祝福に生かされていることを感謝したいと思います。今やいっさいのもののかしらである天上の主を仰ぎ、すべてのものをすべてにおいて満たす方の満ちている教会とされていることを喜び、このかしらなる方の性質を益々映し出す教会の歩みであるように。そしてこの主の祝福が場所・時間・民族を超えて全世界的に拡がるために仕える主の教会の光栄と使命に生かされて行きたいと思います。